

内 科

副院長 内科統括 城 浩介

1. 特徴

内科は現在常勤医 13 名で診療にあたっている。
内科を始め、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、神経内科、腎臓内科、糖尿病内科を標榜している。また名古屋大学や愛知医科大学の医局の御協力をいただき、総計 33 名の非常勤医にきていただいて、非常に専門性の高い医療を提供できるよう整えている。外来診療や入院診療及び夜間救急対応を含めて 24 時間体制で診療を行っているだけでなく、他科のバックアップなど、院内での基礎的な役割を担っていると自負している。内科各科の詳細は各部長の報告を参考にさせていただきたい。

2. 2009 年活動実績

2009 年の目標としてきた、内科増員と診療の充実や病診連携の充実、さらには最先端医療に遅れをとらない努力は、それぞれわずかながらも実現ができたと考えている。腎臓内科の増員があり、当地区の中心的な役割をになうべく確実に進歩したといえる。病診連携では、これまでどおり年 2 回の内科全体の研究会や小規模な病診連携の会を催し、診療所の先生方と直接話しをすることにより、よりよい地域医療が提供できるよう考慮してきた。
また各専門科が、全国学会に参加したり、大学病院からの非常勤医からの情報収集であったりと、最先端医療をとり入れる意識は非常に高い。

3. 2010 年目標

専門的な今後の目標は、内科各科の努力に期待したい。
内科全体としては、地域住民に信頼されることはもちろん、地域の開業医の先生方や、また院内他科や他部門にも期待され頼りにされる内科であるよう努力したい。

呼吸器内科 (2009年より呼吸器科から呼吸器内科に変更)

副院長兼呼吸器内科部長 佐々木 智康

1. 特徴

A. 呼吸器内科の体制

常勤： 1名 非常勤： 4名
外来： 週6日 (常勤2日 月木、非常勤4日 火水金土)
検査： 定期:火曜 午後 臨時:金曜 午後
処置： 火水金 (緊急は除く)

B. 外来診療

COPD (包括的リハビリテーション)、気管支喘息、慢性呼吸不全 (在宅酸素 HOT、在宅人工呼吸療法 HMV)、下気道感染症 (中等症) 気胸、睡眠時無呼吸症候群 (HMV)

C. 入院診療

下気道感染 (中等症)、老人性誤嚥 (内科として対応)、慢性呼吸器疾患の急性増悪 (COPD、肺結核後遺症、間質性肺疾患、急性期リハビリテーションを含む)、急性呼吸不全、肺癌 (癌性胸膜炎、終末期の一部)、HOT、HMV・NPPV導入、VATS/Biopsy (外科に依頼)

小括：2009年10月より常勤医が1名となり重症救急症例には対応不能となった。混乱の見られたX線フィルムレス化が2010年春に導入される。外来は名古屋大学医学部呼吸器内科所属の専門医が毎日診療するし他科の対診依頼は午前中に限度内で対応。検査は原則として外来で施行する。入院は (準) 呼吸不全合併例を対象とする。

2. 2009年活動実績 臨床実績(抜粋)

A. 気管支鏡・経気管支肺生検：45例 D. 気道過敏性検査：8例
B. 肺機能精密検査：54例 E. 在宅酸素療法：28例
C. 気道可逆性検査：45例 F. 在宅人口呼吸療法(NPPVのみ)：13例

学術活動

佐々木智康 胸痛に対し当帰湯が有用だった胃食道逆流症 (GERD gastroesophageal reflux disease) の2例 第10回桃李会総会 2009. 04. 12. 東京

佐々木智康 一般演題 感染症 座長 第60回日本東洋医学会学術総会 2009. 06. 20. 東京

3. 2010年目標

A. 検査：新規検査はない
B. 診療(外来)：禁煙外来 (開設準備中)
C. 診療(入院)：検査入院 (1泊 Sleep Study)、DPC 対応
D. 人的体制：常勤複数化 をめざす

小括：当院が DPC 体制となり、入院診療内容を見直し中で、フィルムレス化対応以外に新規事業は無い。また、禁煙外来の設置により診療に影響が生じる。

消化器内科

消化器内科部長 小栗 彰彦

1. 消化器内科の特徴

消化管（食道、胃、十二指腸、小腸、大腸）、胆道（胆嚢、胆管）、膵臓、肝臓などの消化器全般を対象に診療しています。消化管領域に於いては積極的に内視鏡的治療を行っています。吐血、下血時には、迅速に緊急内視鏡検査を行い、早期悪性腫瘍には（内視鏡的粘膜下層剥離術：ESD、内視鏡的粘膜切除術：EMR）を行っています。急性胆道疾患には、胆嚢穿刺吸引、ドレナージ術、内視鏡的乳頭切開術を行っています。肝臓領域では、ウイルス性肝炎にはインターフェロン、リバビリン、ラミブジンなどの薬物療法により、完治や安定したコントロールを目指しています。原発性肝癌には、ラジオ波凝固療法、肝動脈塞栓術、等を組み合わせた治療を行っています

2. 2009年活動実績（1月～12月）

胃内視鏡検査 2406 経鼻胃内視鏡検査 219

内視鏡的消化管止血術 57 内視鏡的食道下部及び胃内異物摘出術 6

内視鏡的胃十二指腸早期悪性腫瘍粘膜切除術(EMR) 1

内視鏡的胃十二指腸早期悪性腫瘍粘膜下層剥離術(ESD) 7

内視鏡的食道狭窄拡張術 1 内視鏡的食道・胃静脈結紮術(EVL) 4

内視鏡下胃瘻造設術(PEG) 76 内視鏡下空腸瘻造設術(PEJ) 2

内視鏡的逆行性膵胆管造影(ERCP) 58

内視鏡的胆道ドレナージ(ERBD・ENBD) 14 内視鏡的胆道碎石術・截石術 23 内視鏡的胆道ステント留置術(EMS)1

カプセル小腸内視鏡検査 12

大腸内視鏡検査 803

内視鏡的大腸ポリープ切除術 254 内視鏡的大腸早期悪性粘膜切除術 46

結腸内視鏡的止血術 6 経肛門的イレウス管挿入 1

経皮的胆管ドレナージ(PTCD) 9 経皮経肝的胆道ステント留置術(EMS) 2

肝悪性腫瘍ラジオ波焼灼療法 1 経動脈的塞栓療法(TAE) 8

3. 2009年目標

消化器内科の検査や手技の種類は豊富であり、日々進歩しています。最先端の診断、治療手技を常に取り入れながら、患者さんに応じた全人的な診療をするように努めていきます。

循環器内科

循環器内科部長 磯部 智

1. 特徴

循環器内科は常勤2名、非常勤2名で診療活動をおこなっている。以前同様3次救急患者（緊急インターベンションが必要な症例）の受け入れは困難であるが、それ以外の患者の一般外来および救急外来診療を行っている。

2. 2009年度の活動実績

2007年度より開始した冠動脈CTは安定して行えた。本年度より、主に徐脈性不整脈患者の診断と治療指針を決める目的で、心臓電気生理学検査を実施した。以下検査件数である。侵襲的冠動脈造影検査は不可能である。

2009年度 循環器年間検査件数

標準12誘導心電図	: 6045 件
心臓超音波検査	: 1683 件
マスター負荷心電図検査	: 90 件
エルゴメータ負荷試験	: 46 件
ホルター心電図検査	: 307 件
頸動脈エコー検査	: 409 件
冠動脈CTアンギオ検査	: 141 件
右心カテーテル検査	: 11 件
心臓電気生理学検査	: 7 件
対外式ペースメーカー手術	: 4 件
体内ペースメーカー植え込み手術	: 7 件

3. 2010年度目標

当院の特徴であるジェネラリティが診れる循環器医師だけでなく、当院の検診部門の発展に伴い、新規紹介患者が増えると思われるため、そのニーズに応じられるよう努める。研修医および看護師などパラメディカルに対する教育も必要であり、心電図モニター、不整脈、心不全、虚血性心疾患の勉強会を定期的に行い、パラメディカルのスキルアップに協力し、入院患者が安心した入院生活ができるよう、互いに努力する。

糖尿病内科

糖尿病内科医長 山本 由紀子

1. 特徴

(外来診療) 常勤医 2 人、非常勤医 2 人体制で、月曜日から土曜日まで毎日外来診療を行っています。他科・開業医・人間ドックからの紹介患者についても随時受け付けております。

外来患者指導として、月に一度、2 日間セットでの糖尿病教室を行い患者教育指導を積極的に行っております。

(入院診療) 糖尿病教育入院を積極的に受け入れております。血糖の是正だけでなく、患者教育・自己管理意欲を高める指導に重点を置いて入院中のプログラムを作成しております。通常の 2 週間入院だけでなく、2 泊 3 日入院も行っております。

(他科との連携) 他科との連携をスムーズにとれるよう努力しており、他科入院中の患者の血糖コントロールおよび教育指導に関しても力を入れております。

2. 2009 年活動実績

外来延患者数 1 ヶ月平均 502 人

入院患者数 1 日平均平均 13.7 人 (非糖尿病患者を含む)

外来糖尿病教室参加人数 年間 73 名

開業医との連携 北区糖尿病病診連携会議 3 回/年

北区糖尿病懇話会 1 回/年

3. 2010 年目標

スタッフの産休・育休の予定があり、これまで通りの診療体制を維持できるかどうか不明な部分もありますが、今後も紹介・逆紹介を増やすべく開業医の先生方との連携を密にし、地域の糖尿病患者の糖尿病自己管理意欲をアップさせるようサポートして行きたい。

小児科・アレルギー科

小児科部長 後藤 泰浩

1. 特徴

比較的小児人口のある地域のために、月曜から金曜まで午前中一般外来を開いています。午後、予防接種・健診の各専門外来を開いています。入院診療は近隣の開業内科小児科の先生方からの紹介入院、軽症短期入院に限って受け入れます。小児科医療の機能分担の中で基幹病院への橋渡しをしています。医師不足の中、常勤医2名を維持し病院小児科を存続させる努力を続けています。アレルギー科として、本格的な食物アレルギー負荷試験・シックハウス症候群までカバーする専門外来も開いています。

2. 2009年活動実績

- 1月 鯉北耳鼻科会 「春のアレルギーとHibワクチン」 後藤
- 3月 昭和区学校医会 「最近のウイルス感染症」 後藤
- 6月 第16回名古屋北部小児連携の会 総合上飯田第一病院
- 7～9月 新型インフルエンザ 医局 職員集会 薬局 病院内対策講習会
- 10月 中川区 学校医総会 『新型インフルエンザ流行について』 後藤
- 11月 名古屋市幼児教育研究協議会 安全部会研修会 名古屋市教育会館
「感染症」-幼稚園での対策とワクチン- 後藤
- 11月 第17回名古屋北部小児連携の会『新型インフルエンザ流行への戦略』
-今回のパンデミックの成り立ちとアジア風邪の歴史から- 後藤

2009年は“新型インフルエンザ”とそのワクチン接種で大変な年度となりました。幸い比較的軽症のインフルエンザ流行となりましたが、日本国内でも時季外れの流行となり若年層を中心に1割程度が感染しました。診療体制を整え、感染拡大防止と後手に回った国のワクチン供給に苦慮しました。

3. 2010年目標

ワクチン接種に力を入れてきましたが、昨年度10月から土曜日の午前外来を接種・健診・定期受診のための予約外来とし予防接種の拡充をしました。乳児向け肺炎球菌ワクチン 渡航目的等内容強化を図ります。

小児発達相談の専門外来を新たに立ち上げる計画です。

外科

副院長外科統括 山口 洋介

1. 特徴

消化器外科をはじめとし、呼吸器外科、小児外科と幅広く対応しています。2009年より胆石症のみならず大腸、胃に関しても鏡視下手術に対応できるようになりました。また、乳腺外科・甲状腺外科に関しては中部地区の中核病院として頑張っています。

<スタッフ>

加藤万事 (S58 卒、院長、甲状腺・乳腺外科)

三浦重人 (S38 卒、特別顧問、乳腺外科)

加藤知行 (S42 卒、特別顧問、大腸外科)

山口洋介 (S62 卒、副院長、消化器外科)

窪田智行 (H4 卒、乳腺外科部長、乳腺外科)

佐々木英二 (H5 卒、外科医長、一般外科)

杉浦友幸 (H6 卒、一般外科)

岡島明子 (H8 卒、一般外科)

雄谷純子 (H10 卒、一般外科)

以上、名古屋大学腫瘍外科教室から安定したスタッフの供給をうけ、特別顧問2名を含めた9名で診療にあたっています。

2. 2009年活動実績

全身麻酔手術件数は667例。

以下に主な手術数を示します。

虫垂炎手術	32例	幽門側胃切除術	16例
ヘルニア手術(成人)	76例	胃全摘術	18例
腹腔鏡下大腸切除	12例	結腸切除術	47例
腹腔鏡下胃切除	2例	低位前方切除術	19例
腹腔鏡下胆嚢摘出術	78例	直腸切断術	6例
開腹下胆嚢摘出術	13例	乳癌根治術	105例
総胆管切石手術	8例	甲状腺手術	137例
腎臓摘出術	1例	肺切除術	7例
臍頭十二指腸切除術	3例	気胸手術	6例
臍体尾部切除術	1例	食道亜全摘術	2例
胆道癌による肝切除術	3例	イレウス手術	13例
その他の肝切除術	13例	腹膜炎手術	5例
痔核手術	4例		

3. 2010年目標

地域の中核病院としての地位を築いていくとともに鏡視下手術のさらなる拡大を目指します。

整形外科

整形外科部長 良田 洋昇

1. 診療科の特徴

当院整形外科はTHA、TKA等の人工関節手術と膝、肩関節の関節鏡手術を主体とした関節外科を専門としております。手術件数も年々増加しており、特に高齢者の大腿骨近位部骨折の手術は一昨年に続きまして180例を超えました。また昨年は脊椎手術の増加が目立ちました。その他リウマチ、腫瘍、スポーツ等の専門外来を設けており、地域の中核病院として幅広い領域の整形外科疾患に対応可能であります。

2008年より発足した近隣の整形外科開業医の先生方との病診連携の会、上飯田アーバンも回数を重ねましてまいりました。今後も諸先生方のご協力を頂きまして、本会を継続、発展させていきたいと考えています。

2. 2009年活動実績

手術件数 724件

内訳	人工骨頭置換手術	71件
	大腿骨骨折観血的手術	118件
	人工膝関節置換手術	29件
	人工股関節置換手術	8件
	膝関節鏡手術	100件
	肩関節鏡手術	18件
	その他	318件

2009.1.31 第3回上飯田アーバン

講師 名古屋大学准教授 松山幸弘先生

2009.7.25 第4回上飯田アーバン

講師 愛知医科大学教授 本庄宏司先生

3. 2010年目標

地域の中核病院としてまた膝、肩、股関節の専門病院として広く認知されるように鋭意努力していきたいと思っております。今後とも皆様方のご協力をよろしくお願い申し上げます。

皮膚科

皮膚科医長 野尻 万紀子

1. 特徴

皮膚科では、アトピー性皮膚炎や蕁麻疹等の日常よく見られる疾患、帯状疱疹や疣贅などのウイルス性疾患、白癬、カンジダ等の真菌症、伝染性膿痂疹等の細菌感染症、水疱症、腫瘍性疾患、熱傷、糖尿病性皮膚潰瘍や膠原病をはじめとする全身性疾患にもとづく皮膚病変等さまざまな疾患の診断、治療に携わっています。また、病変によっては血液検査やパッチテスト（化粧品や金属アレルギーを含む）プリックテスト、薬剤アレルギー検査等を行い原因検索を行ったりしております。

皮膚腫瘍に関しては病理組織検査などの各種検査を施行、確定診断後に必要時近隣形成外科へ紹介しております。

その他、スキンケア指導や洗剤、保湿剤、基礎化粧品などの紹介等も行っております

現在皮膚科は常勤医 1 名、毎週火曜日は非常勤医 1 名体制で外来診療を行っております。

2. 2009 年度活動実績

第 1 回東海創傷勉強会

第 6 0 回日本皮膚科学会中部支部学術大会 研修講習会

ケミカルピーリング講習会

日本皮膚科学会東海地方会

第 2 回皮膚病理講座セミナー

院内褥瘡勉強会（発生要因、薬剤、創傷被覆剤等）開催

3. 2010 年目標

大学病院と連携し市中病院皮膚科としてニーズに応えられる医療を目指す。
2009 年度より開始したケミカルピーリングに加え日常のスキンケア指導を行いさらなるレベルアップを図りたい。

泌尿器科

泌尿器科医長 中根 明宏

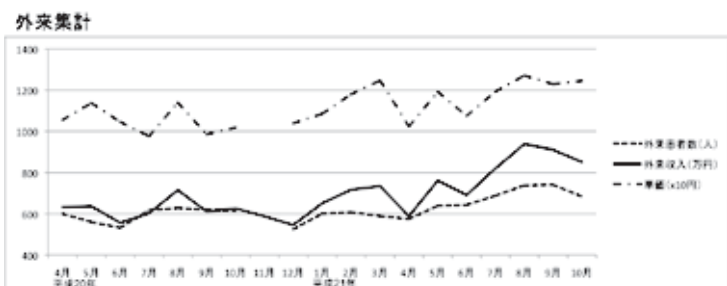
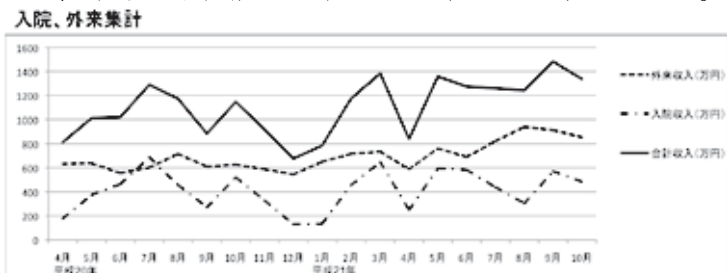
1. 特徴

近年増加する前立腺疾患や、男女問わず QOL を下げる排尿の問題、特に過活動膀胱などの疾患を中心に、ほとんどの泌尿器科疾患の診療を行っている。前立腺癌の針生検検査による診断から治療を行い、必要に応じて大学病院などの高次病院での治療が必要な症例を選択、紹介し、高次治療終了後は当院外来での継続治療をするなど連携を生かした治療を行っている。表在性膀胱癌、前立腺肥大症の内視鏡手術を積極的に行っている。

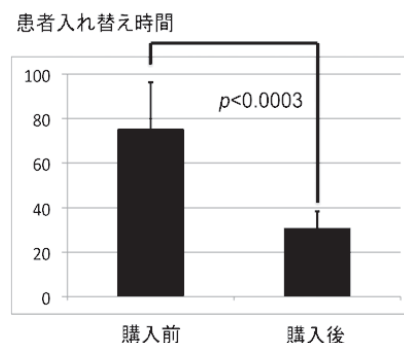
2. 2009 年活動実績

外来診療：排尿障害、前立腺疾患、尿路生殖器癌の患者さんを中心に診察している。

安定した患者さんを午前中に診療し、インフォームドコンセントや検査の必要な患者さんは午後に行うことで積極的な外来機能の住み分けと診療の効率化を図ったり、前立腺癌の外来化学療法を新しく取り入れて行うなど新規分野を開拓することで、順調に患者数及び1診療あたりの診療報酬が増加した。数値としては、平成 20 年の外来患者数約 580 人/月、単価 10800 程度から平成 21 年 10 月までで約 650 人/月、単価 11700 であり。特に最近では 700 人/月前後、単価 12000 程度とさらに伸びてきている。



入院診療：外来患者数の増加に伴い入院診療患者も増加の傾向にある。重点的に進めてきた内視鏡手術の症例数と増加傾向にある前立腺癌の早期発見を目指した積極的かつ系統的な前立腺生検検査数は昨年の 1.5～2 倍程度となっている。それに伴い新規前立腺癌患者数が増加し、外来での治療患者数の増加へと繋がっている。また DPC 導入に対応したパスを作成した。現在、前立腺生検、内視鏡手術の TUR-Bt、TUR-P、小児泌尿器科疾患手術の 4 つパスがあり、導入時に DPC に沿った内容へ全面的に修正し、その後さらに運用上の問題やコスト面を評価し、前立腺生検、TUR-P を一部修正した。内視鏡手術の増加に伴い、内視



泌尿器科

鏡セットが1本では安全で効率的な手術治療が困難であると判断し、新しい内視鏡手術セット（TURis システム）を購入した。これは従来のものに比べて合併症の減少とランニングコストの削減がはかれるものである。1日に2件以上の内視鏡手術を行った際に患者移動や部屋の準備以外に内視鏡セットの滅菌をする時間が必要であったため、患者さん退室後から次の手術開始までに平均75.4分（50～105分）かかっていた状況が平均31.0分（20～40分）と半分以下となり、今まで出来なかった1日3件の内視鏡手術も可能な状況となった。

学会活動：新しい臨床知識獲得目的も含めて、積極的な学会参加および発表を行っている。

4月 第97回日本泌尿器科学会総会（岡山）「膀胱尿管逆流症における排尿状態の検討」ポスター発表、アメリカ国際泌尿器科学会（米国シカゴ）「Satisfaction with voiding, appearance, and sexual function in adolescents after hypospadias repair during childhood」

6月 第6回泌尿器科再生再建医療研究会（神戸）「遺伝子導入ES細胞からの腎構成細胞の分化をめざして」

8月 春日町役所「おしっこの話」、清須市福祉会館「おしっこの話」

9月 第245回日本泌尿器科学会東海地方会（名古屋）座長

10月 第18回日本小児泌尿器学会総会（淡路）「Pax2 遺伝子導入ES細胞からの尿細管細胞分化の検討」、第59回日本泌尿器学会中部総会（金沢）「Pax2 遺伝子導入ES細胞からの尿細管細胞分化の基礎研究」

論文発表：Nakane A, Kojima Y, Hayashi Y, Kohri K, Masui S, Nishinakamura R: Pax2 overexpression in embryoid bodies induces upregulation of integrin alpha8 and aquaporin-1. *In Vitro Cell Dev Biol Anim.* 2009 Jan-Feb;45(1-2):62-8.

地域医療への活動：新規患者獲得、地域患者の健康増進のため市民公開講座依頼に応じた。

3. 2010年目標

これまで行ってきた診療の効率化と重点と考えている疾患の治療を継続、進歩させたい。当科で果たすことの可能な診療を十分に行い、当院の他科の先生方、医療、医事スタッフの皆さんや高次治療施設と緊密に連携しながら「信頼され、愛される病院」の理念達成の一助となるよう努力することを目標とする。

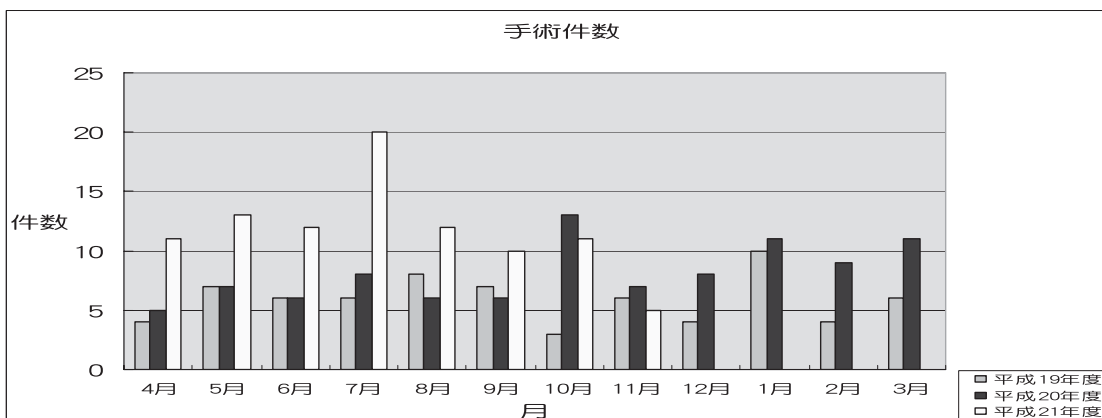
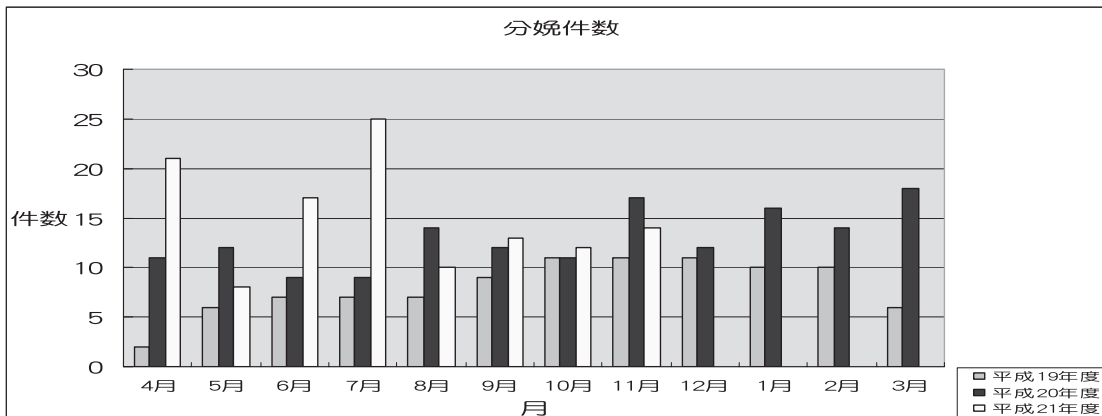
産婦人科

産婦人科部長 徳橋 弥人

1. 特徴

当院産婦人科は、医師不足のため規模を縮小する施設や分娩取り扱いをやめる施設が多い中で、何とか分娩を含め産科婦人科一般を行っております。常勤医1人と数人の非常勤医で診療に当たっており、名古屋大学産婦人科とも密な連携を行っております。1人常勤でもありやれる事が限られてきますが、少しずつ分娩数・手術数も増えてきております。

2. 2009年活動実績（分娩・手術）



3. 2010年目標

可能なら4D エコーなどを導入し、よりいっそうの患者サービスを行い地域の中核病院として地位を築いていきたいと考えております。

眼 科

眼科部長 古川 真理子

1. 特徴

1989年、網膜硝子体手術名医の荻野誠周先生を中心として眼科が開設され、以後、網膜硝子体手術を得意とする眼科として発展してきました。2002年3月からは2代目部長、古川体制となりました。診療圏は愛知県、岐阜県、三重県に及び、網膜剥離、糖尿病網膜症、黄斑疾患などの網膜硝子体手術を中心とし、白内障手術、緑内障手術、アバスタチンなどの硝子体内薬物投与、その他の手術も含めて年間1,000件以上を行っています。2004年からは加齢性黄斑変性症に対する光線力学療法（PDT）も行っています。白内障手術は、総合病院であることの利点を生かして、入院を必要とする方を主に行っています。また、手術例の90%以上が眼科からの紹介であり、関連病院でないにもかかわらず紹介頂く先生方との信頼関係の上に成り立つ眼科です。したがって、患者さんのみならず、紹介医にも満足して頂き、治療のフィードバックを常に心がけ、最良の治療を目指して実践することを使命と考えています。

2. 2009年活動実績

(論文) K, Furukawa M, Ogino N, E Larson, Iwaki M, Tachi N

Long-term Follow-up of Vitrectomy for Diffuse

Nontractional Diabetic Macular Edema RETINA 29:464-472, 2009

(学会発表)

- ◆ 第113回日本眼科学会総会 熊谷 和之
強度近視黄斑分離に対する硝子体術後の視力因子
- ◆ TRC 高井 祐輔
黄斑浮腫を伴う静脈閉塞症に対する組織プラスミノゲン活性化因子
(tPA) 治療

(勉強会) 2009. 5. 20

- ◆ 演題：多焦点 IOL 挿入眼の硝子体手術
(演者：眼科三宅病院 太田一郎先生)
- ◆ 演題：当院における小切開硝子体手術 (演者：古川真理子)
- ◆ 演題：内境界膜剥離で閉鎖した黄斑円孔の再開、閉鎖に数ヶ月を要した黄斑円孔、非定型黄斑円孔、黄斑剥離網膜剥離手術後の黄斑移動
(演者：熊谷和之)
- ◆ 演題：当院における眼内炎に対する硝子体手術 (演者：高井祐輔)

3. 2010年目標

普遍的な目標は自分が受診したい眼科を作ることです。多くの医師を備え、より多くの手術件数をこなす眼科はいくらでもあります。基本姿勢および診療の質が低下すれば当科の存在価値はありません。

耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科部長 久野 佳也夫

1. 特徴

常勤医 1 名の診療科ですので手掛ける診療内容をしばって安全・確実な診療を心がけています。力を入れている分野は、音声障害、小児のアデノイド・扁桃疾患、悪性腫瘍の早期診断、副鼻腔炎の手術治療ですが、鼻出血、めまいなどの救急疾患に対してもできるだけ遺漏なく対応できるような体制をとっています。

また、名古屋大学耳鼻科より週 2 回の代務医派遣を仰いでいるので、手術は必ず複数の医師が在院する時に行うことを原則としています。

成人・小児に対する人工内耳、耳鳴りの精査治療、メニエール病の画像診断、良性発作性頭位めまい症難治例の診療、顔面神経麻痺に対する早期手術を含めた診療、耳管機能不全に対する高度診療、ナビゲーションシステムなどを要する鼻・副鼻腔危険部位の手術、嗅覚障害の官能検査、中学生以上のアデノイドや 30 歳以上の扁桃手術のような大量出血の危険のある治療、3 歳以下の気道異物、嚥下診療への耳鼻科分野でのアプローチ、頭頸部悪性腫瘍の根治診療など、人員や設備の関係から当院では充分対応しきれない分野も多いので、常に最新の知識・情報を入手するようにしております。

2. 2009 年活動実績

1 月 24 日 第 4 回 鯨北耳鼻科会 講演：ウイルス感染症について

講師：当院小児科 後藤部長

手術室での年間手術は 40 件（うち局所麻酔は 4 件）でした

3. 2010 年目標

地域開業医との連携により耳鼻科診療の幅を広げていきたいと考えています。

麻 酔 科

麻酔科部長 岩田 健

1. 特徴

- ①手術麻酔はもとより、術後の鎮痛・疼痛緩和にも努めています。
- ②完全静脈麻酔法(TIVA)・吸入麻酔薬による麻酔導入維持法(VIMA)に、末梢神経ブロック・硬膜外患者自己調節鎮痛法(PCEA)/経静脈的同法(IVPCA)の併用をおこない、術後疼痛対策を含めた全身管理を実施しています。
また、帝王切開術に対しては、脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔(CSEA)を第一選択としています。
- ③手術室看護師とともに、患者の安全を第一に考え、術者に安心して手術をしていただける環境作りに心がけ、並列で34件の麻酔科管理施行を目標にしています。
- ④さらに、日常の痛みに悩む患者のQOL改善に向け、火曜/金曜の週2回、ペインクリニック外来を開設しており、ここでの神経ブロック技法は手術麻酔にも応用しています。

2. 2009年(平成21年)活動実績

手術件数 (1~11月末日までの手術室集計による)

総手術件数	2,723件	(2,813件)
全身麻酔件数	1,249件	(1,254件)
麻酔科管理件数	1,277件	(1,225件)
各科手術件数		
眼科	1,100件	(1,174件)
外科	708件	(754件)
整形外科	660件	(638件)
産婦人科	125件	(86件)
泌尿器科	65件	(74件)
耳鼻咽喉科	35件	(44件)
脳神経外科	15件	(24件)
内科	12件	(14件)
皮膚科	1件	(4件)
麻酔科	2件	(1件)

ペインクリニック患者数 (1~11月末日までの外来集計による)

1,452件 (1,324件)

()内はいずれも平成20年実績

3. 2010年目標

手術室の電子カルテ化・手術室支援システム化に向けての整備

もの忘れ評価外来（老年精神科）

老年精神科部長 鵜飼 克行

1. 特徴

平成21年10月から、「もの忘れ評価外来（老年精神科）」という、認知症が心配な方のための専門外来を、それまでの「上飯田リハビリテーション病院」から「総合上飯田第一病院」に移転して、再度？の開設を行いました。これによって、他の診療科との連携が、より容易となりました。

頭部CT・MRI・MRA・VSRADや頸部US検査、名古屋大学医学部・放射線科と連携した脳血流SPECT（3DSSP）、MIBGシンチグラフィなどの画像診断、名古屋大学医学部・精神科から派遣される臨床心理士による精密な神経心理検査（WAIS-III・ADAS・WMS-Rなど）を組み合わせ、脳の老化や病気の早期発見・鑑別診断を行っています。

認知機能に影響を及ぼす、高血圧・脂質異常症（高脂血症）・糖尿病・脳梗塞・脳血管障害・パーキンソン症候群・うつ状態・睡眠障害・せん妄など、身体・精神疾患も視野に入れた、全人的な診療を目指しています。また、認知症高齢者への食事指導を行う管理栄養士、精神保健や福祉・介護の専門家である精神保健福祉士・社会福祉士からなる「医療福祉相談・もの忘れ相談室」など、多職種によるチーム医療を実践しています。

さらに、地域の介護保険・ケアマネさん・施設の方々との連絡を密にして、食事・睡眠・運動・知的活動などの生活に重点をおいた指導・介入（生活療法）を行っています。

2. 2009年活動実績

「もの忘れ評価外来」は、月曜日と水曜日の週2日制で行っています。初診では2時間程度の診療時間が掛かるため、月曜日と水曜日の午後から週2～3名程度を目処に診察しています。平成21年の初診患者数は、合計91名でした。

<学術論文>

- ・「胃前庭部毛細血管拡張症を合併したアルツハイマー病の1例」 精神神経医学雑誌
- ・「Distribution of neurofibrillary tangles in diffuse neurofibrillary tangles with calcification (DNFC)」 Psychiatry and Clinical Neurosciences
- ・「Physical Complications in the Ward for the Elderly with Senile Dementia in the Imaise Branch of Ichinomiya City Hospital」 PSYCHOGERIATRICS

<教育>

- ・中部学院大学 非常勤講師 「精神医学系医療学」講座

<講演>

- ・名古屋市北区医師会 「第3回・北区認知症研究会」
- ・名古屋市北区医師会 「第5回・北区認知症研究会」
- ・済衆館病院（北名古屋市） 「生活習慣病として見る認知症」

<寄稿>

- ・名古屋北法学会だより 「精神医療の入り口」

健診センター

センター長 脇田 彬

1. 特徴

平成20年9月に“健診センター”と名称を変更し、北館6階へ拡張移転をして早1年が過ぎました。

おかげさまで受診者様からは称賛のご意見を沢山いただき、受診件数も順調に伸びています。

健診コースも従来の「半日ドック」、「脳ドック」、「乳癌検診」、「子宮癌検診」、「一般健診」、「協会健保生活習慣病予防健診」、「特定健診」、「特定保健指導」、各種「オプション検査」などに加え、新たに「簡易脳検診」、「肺癌検診」、「レディースドック A・B」を新設し、受診者様の多種多用のニーズに幅広くお応え出来る様努めております。特に「簡易脳検診」、「肺癌検診」、「乳癌検診」などは午後の受付も行い、短い時間で出来る検診コースに設定いたしました。

当センター職員一同は健診コースの充実以上に受診者サービスの充実に日々取り組んでおります。受診された方にアンケートのご記入をお願いし、満足度の採点や、不満・要望等々のご意見を頂き、そのご意見を真摯に受け止め、即時改善へ繋げております。

また、昨年度から政府指針でスタートした「メタボリックシンドローム対策」の一環である「特定健診」、「特定保健指導」にも積極的に取り組んでおります。

「特定保健指導」では専属の栄養士による管理・指導のもと、今年度は積極的支援3名、動機づけ支援12名の方が生活習慣の改善に取り組みました。そのうち10名の方に体重や腹囲の数値に改善がみられました。

2. 2009年活動実績

半日ドック 1359名、 脳ドック 220名、 乳癌・子宮癌検診 369名

協会健保健診 856名、 一般健診 1126名 特定健診 372名。

特定保健指導 51名

3. 2010年目標

昨年同様、総合病院に附属する健診センターという特徴を生かし、全項目を自施設で行い、迅速かつ正確な結果をもとに二次検査や治療の必要となった受診者を速やかに当院自慢の各専門診療科へ紹介させていただき、受診者からの“安心”と“信頼”を得られるように努めます。

看護部

看護部長 石黒 接男

1. 特徴

2009年 看護部目標

- (1) 看護業務の改善及び効率化を図る
固定チームナーシングの促進を行う
- (2) 看護の質の向上
現任教育を強化する

看護職員の動向

入職者数（パートを含む）	看護師 新卒者24名	既卒者17
	准看護師 既卒者2名	
	助産師 新卒者1名	既卒者2名
2009年11月末現在	看護師（パートを含む）	175名
	准看護師（パートを含む）	16名
	助産師（パートを含む）	13名

2. 2009年活動実績

- (1) 看護職員確保対策の取り組みの一環として
 - ・看護ナビフォーラムブースへの出展
 - ・病院見学会の実施
 - ・国家試験対策講習会の実施
 - ・就職・転職フェアブースへの出展
- (2) 入社後のフォロー体制の強化の一環として
 - ・新人職員とのランチョンミーティングの実施
 - ・入社3年目職員とのランチョンミーティングの実施
- (3) 看護の質の向上・教育体制の充実の一環として
 - ・認定看護師・国内留学制度の規定の整備
- (4) 管理部門の組織編成のリニューアル
 - ・病棟・外来統括師長の新制

3. 2010年目標

- (1) 看護実践能力の向上
- (2) 看護師の定着促進
- (3) 認定看護師養成の支援

リハビリテーション科

リハビリテーション科長 影山 滋久

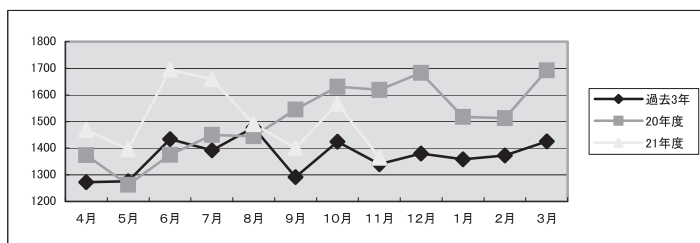
1. 特徴

- 1) 施設基準：脳血管疾患リハ I、運動器疾患リハ I、呼吸器リハ I。
- 2) スタッフ：理学療法士 10 名、作業療法士 6 名、言語聴覚士 3 名、助手 3 名。
- 3) 基本方針：早期訓練、早期離床、早期退院を目指す。

2. 2009 年活動実績

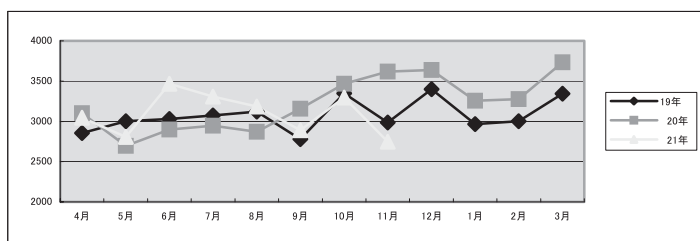
- 1) 学会発表：(PT) 日本理学療法士学会に 2 演題、(OT) 高次脳機能障害学会に 1 演題、他に東海北陸学会等地方学会においても発表している。
- 2) 実習受け入れ：(PT) 名古屋大学を含め 7 校から 16 名、(OT) 名古屋大学を含め 5 校から 6 名及び高校生の見学を受け入れている。
- 3) 関連施設との連携：昨年に引き続き S T を中心に愛生福社会（愛生苑、庄内の里、鳩の丘）での指導、勉強会を継続している。
- 4) 地域連携パス：21 年 1 月から 11 月の算定患者数は、大腿骨頸部骨折 85 名、脳卒中 25 名で脳卒中はパスに乗りにくい傾向がうかがわれる。
- 5) 患者動態と収益

図の上は収益、下は患者数を示しておりほぼ患者数の増減に収益は比例している。



また3年間の患者数の推移が異なるが、その要因は不明。

20年度の収益は過去最高であったが、21年度の上半期の収益は20年度の約50%のため下半期の患者数の変動が問題となる。



3. 2010 年目標

PT、OT、S Tの個々のスタッフの技術の向上のため院内勉強会及び院外の研修会に積極的に参加させ専門資格を摂取させる。また今年度と同様に学会発表をテーマを決め行わせる。対外的には、愛生福社会及び愛知県理学・作業療法士協会との連携を更に深めていく。また各大学及び養成校の学生の臨床教育の充実を図る。最後に 22 年度の診療報酬改定に対応できるように体制を整え増収を検討していく。

栄 養 科

栄養科顧問 岡本 夏子

1. 栄養科の特徴

下記の目標に向かい、美味しい食事作りと栄養サポートに取り組んでいます。

- 食事では
1. 患者様を第一に考えた料理の提供
 2. 治療効果が十分活かされる食事
 3. 整理・整頓・清潔・清掃・躰の実施
- 栄養指導では
1. わかりやすい説明
 2. 患者様の立場で考えた提案
 3. 習慣づける生活改善のアドバイス

昨年、第一とリハビリ病院の給食管理面のコンピューターライン化を実施し、栄養士業務の削減・省力を計りました。さらにクリニックを含めた3施設の栄養士(10名)が協同して、相互の業務を遂行する体制づくりをしました。外来栄養食事指導や入院患者様の栄養管理の充実に努め、栄養状態を改善することで、最大なる治療効果の発揮にチームで取り組むよう努力しています。

2. 2009年活動実績

1. 日本腎臓病学会の定義に基づいたCKD（慢性腎臓病）の食事基準の見直し
2. 地域連携の栄養ケアシステムの構築

NST委員会との共同で、施設・転院時のNST（栄養）要約書の作成

愛生福祉会と検討会実施（施設ごとの差をなくすために）

摂食・嚥下困難食の食事内容の検討と統一化

経腸栄養の基本と手技についての統一化

3. 指導件数（2009年）

外来栄養食事指導	565	栄養管理実施加算	69,497
入院栄養食事指導	1,437	NSTサポート患者	422
栄養食事指導	190	ドック栄養相談	1,115
高齢者栄養食事指導	102	特定保健指導	148

その他 昼食時は摂食状況や喫食量のチェックを実施しています。

4. NST ランチョンセミナーの実施
5. 栄養士のNST ラウンド業務内容のマニュアル作成
6. 職員食堂の改装 食育のすすめ・メタボ対策として栄養量の表示
7. 委託会社NGFとQC活動の実施（水道光熱費の削減）

3. 2010年目標

1. 緩和ケア患者様の早期栄養マネジメントの介入
2. 経腸栄養（2週間以上継続）の見直し（栄養剤の検討と手技の確認）
3. 残食の減量（給食作業効率の見直し）

検査科

検査科技師長 松崎 雄一

1. 特徴

検査科は、城部長をはじめ総勢16名で構成されています。日常業務の範囲は生理検査、検体検査、病理検査、輸血検査、採血業務に加え、耳鼻科の聴力検査、外科乳腺エコー、健診センターの臨床検査部門などへも出向しています。

地域医療を推進するため、迅速で正確な検査を24時間体制で行い、患者様の信頼感および安心感を得られる医療サービスの提供に努力しています。また、良質な医療を提供するため、個々の知識および検査技術の向上を目指し、学会、研修会などの発表を積極的に行っています。

2. 2009年活動実績

一般生化学をはじめ、腫瘍マーカー、甲状腺ホルモンなど外来迅速検査を実施しています。

2009年の臨床検査(検体検査)取り扱い件数

総取り扱い件数 79,637件

院内検査件数 73,299件

外来 53,402件 (迅速件数 42,199件)

入院 19,897件

院外検査件数 6,338件

2009年の臨床検査(病理検体)取り扱い件数

病理生検数 2,036件

手術検体件数 1,026件

細胞診件数 3,831件

院外活動

2009年9月12日 日本乳腺学会中部地方会 乳腺細胞診の偽陰性症例の検討

院内活動

看護師対象の心電図波形の読み方講習会計3回実施

3. 2010年目標

臨床検査技師として各人の資質向上を図る目的で、各種認定技師の資格習得を目指し、専門性の研磨に励む。

臨床に近い検査技師として、チーム医療に貢献する。

CBG リサイクラーを導入して、アルコール等の資源を有効的に再利用し、環境保全に貢献する。

放射線科

放射線科技師長 片桐 稔雄

1. 特徴

当放射線科は、地域の患者様から「信頼され愛される病院」の理念のもと、質の高い画像を提供できるように、日々研鑽しています。そのために、放射線技師一人ひとりが、プロ意識を持って、成長できるように育成、組織作りをしています。学会や勉強会の参加にも力を入れ、専門的知識と技術をもって、患者様に安全で安心な検査を提供できるように勤めています。

また、最先端の医療を提供するために、最新かつ高性能な画像診断機器を導入し、病気の早期発見、早期治療を目指しています。

また、関連医からの紹介の検査（MRI、CT）も行い、地域医療に貢献しています。健診にも、力を入れ、予防医学にも貢献しております。

2. 2009年活動実績

CT件数は、年間約9700件 月におよそ810件（昨年比 10%UP）

MRI件数は、年間約4570件 月におよそ380件（昨年比 15%UP）

乳房撮影は、年間約2890件 月におよそ240件（昨年比 20%UP）

マンモトームは、年間約160件 月におよそ13件（昨年比 7%UP）

健診胃透視は、年間約1950件 月におよそ160件（昨年比 15%UP）

その他、一般撮影が、一日100～150件

すべて、年々増加しております。

3. 2010年目標

読影システムの導入

2009年12月にCT、MRIの読影システムを導入しました。

昨年同様、完全フィルムレス化を進めて行きたいと思えます。

その後、ペーパーレス化へと発展させたいです、しかし、放射線科だけでは難しい為、病院全体の目標とし、関係スタッフによりチームを作り、そこを中心に電子化へと推進を行ないたいです。

完全デジタル化

マンモグラフィのデジタル化を検討し、完全デジタル化の構築を考えたいと思えます。

その他

インフラの整備（MRI）を行い、関連病院との連携を深め、多施設との差別化を図りたいと思えます。

また、マンモグラフィの認定施設の取得し差別化を図りたいと思えます。

薬 局

薬局長 中西 啓文

1. 特徴

円滑に医療行為ができる様に、薬剤の調剤・調製を基に、薬剤の提供及び薬品の情報提供等を適切に行い、サポートする。

薬剤の適正使用を目的に、処方チェック・使用法チェック等、チェック機関として全てのチェックを行う。

病棟業務・チーム医療を通じ、患者様を直に観察し、副作用症状などの情報収集に努める。

スムーズに治験が行えるように治験薬管理を行いサポートする。

以上の業務を10名の薬剤師と1名の事務スタッフで取り組んでいる。

2. 2009年活動実績

一時的に業務効率や質の落ち込みがあったものの、新人教育に重点を置くことにより、比較的効率よく育成を進めることが出来、早い段階でルーチンワークや病棟業務を前年度レベルに引き上げることが出来た。

件数が激減していた病棟業務（服薬指導）については、前年度目標とした300件/月をクリアするレベルにまで回復している。

薬品管理に改良を加えながら、SPDと共に無駄の無いように努めた。

後発品導入により、先発品との差額を節約することが出来た。

調剤業務・注射剤調剤業務については、以前からの当院独自のセット付け方法を駆使し、効率よく払い出しが出来ている。

院内製剤の調製は、以前から使用しているものを厳選し、在庫量の見直しも行った。無菌調製もクリーンベンチ使用により引き続き行っている。

一部の抗生剤（MRSA用薬剤）について薬剤師によるTDM業務を続けてきたことにより認知され、依頼が増加し、薬剤の適正使用の一躍を担っている。

治験コーディネーターと共に治験薬管理を行い、保管状況も良好である。

当直体制は、外部からのスタッフにも力を借りながら順調に熟している。

3. 2010年目標

ルーチンワークについては新人に於いても一通りの業務が熟せるようになっている専門性を持たせるための教育が重要になってくる。2010年度の課題とする。

化学療法室の設置を目指している。それに伴い、外来・入院の化学療法剤のミキシングが薬局で行えるようにし、外来処置室の負担軽減と部署間の流れをスムーズにするのを最優先の目標とする。

さらなる後発医薬品の導入を進めていく。

医療福祉相談

医療福祉相談室課長 権田 吉儀

1. 特徴

当院の医療ソーシャルワーカーは現在4名で、各病棟単位の専任制としています。患者様やその家族の方々の抱える経済的・心理的・社会的問題の解決や調整を援助し、社会復帰の促進を図る業務を行っています。

具体的には、医療費・生活費問題の解決・調整援助、療養中の心理的・社会的問題の解決・調整援助、入院相談や転院・入所相談等の受診・受療援助、復職や就学・住居等退院時（社会復帰）援助、地域活動を患者様の主体性やプライバシーの尊重を重視して支援しています。

今日の経済不況下での健康保険制度の改定等の影響を受け、経済的（医療費・生活費）の問題相談の増加傾向にあります。病棟担当制を行う中で入院の早い段階から退院支援業務確立を推進するシステムを確立させつつあります。以前からの傾向ではありますが要介護高齢者の退院支援にあたっての相談件数が群を抜いて多い状況です。

2. 2009年活動実績

2009年の相談件数実績は、延べ8,113件でした。新規相談ケースは1,442件（入院1,117件 外来325件）でした。

2009年の課題として退院支援・援助について退院後の療養支援を効率的であり質的にも担保できるシステムの構築を掲げ「退院支援の中心に、リエゾンチーム（仮称）という多職種チームをつくり、入院から退院までの継続的カンファレンスをおこなうことにより、支援対象者の入院中での治療状態及び退院後の環境（社会的背景）状態のチェックと退院時に予測されるリスクマネジメントを実施すること。同時に具体的な退院支援・援助を医療ソーシャルワーカーが中心に展開するとしました。その具体化として病棟担当制の実施。早期介入支援の具体化とし全入院患者様の入院時の社会背景評価を実施しました。このリエゾンシステムの結果は、スクリーニング抽出件数は、1,681件であり具体的に介入支援件数は、814件でした。

公費医療制度利用を推進する事も掲げ、福祉給付金制度利用申請は、64件でした。

3. 2010年目標

今年の重点目標は リエゾンシステム（退院援助支援システム）についてリエゾンシートも完成させ具体的な実践の年と考えています。

更に今年度も公費医療制度（障害医療費助成 福祉給付金）の利用の推進につとめます。昨年掲げた福祉・介護情報の定期発信が出来ずに終わってしまっていたので最低4回の通信を職員向けに発行する予定です。また、昨年後半より整備された地域医療連携室の協同の業務も今年度は具体化して行きます。これらの活動を通して医療・介護・福祉連携の課題についてもしっかりと位置づけて愛生会関連法人も含めた地域連携を推し進めていきます。

地域医療連携室・予約センター

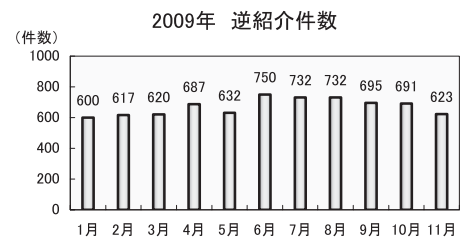
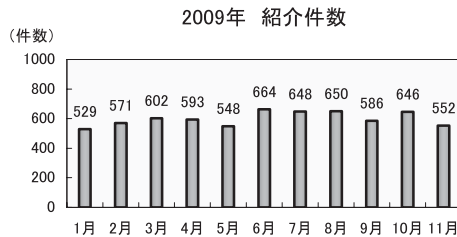
地域連携室・予約センター 荒川 裕子

1. 特徴

当部署は事務員5名、地域連携看護師1名で構成しており、地域医療連携室としては地域の医療機関や福祉施設等との窓口の役割を担い、紹介患者様の受付対応や回答書の管理、紹介検査や診察の予約対応等を主な業務としております。また、定期的で開催する北区の医療機関を中心とした勉強会にも携わっております。予約センターとしては通院中の患者様に対して、診察および検査の予約や予約日の変更、また各検査の内容説明をしております。

2. 2009年活動実績

2009年（1月～11月）の紹介件数の実績は6,589件で、2008年の同時期と比較すると258件の増加となりました。逆紹介数の実績は7,379件で、2008年同時期より594件の増加となりました。



毎年開催する講演会に加え、今年は福祉等に従事される方々を対象とした講演会も開催いたしました。また、10月よりカウンターの一角に「患者相談窓口」を設置し、連携看護師による療養相談を開始しました。

患者相談窓口 活動実績

	相談件数	相談内容
10月	14	受診科相談、療養相談、処方薬相談
11月	10	医療費相談、メンタル相談、クレームなど

2009年 開催した講演会等

開催日	会名
2月14日	第9回 名北病診連携セミナー
5月30日	北区医師会学術講演会
10月17日	第10回 名北病診連携セミナー
11月14日	第1回 地域連携講演会

3. 2010年目標

- ・地域連携看護師の業務範囲の拡張と充実
- ・当院の案内パンフレットの作成
- ・地域連携開業医のリーフレットの作成
- ・リエゾンシートの運用
- ・地域医療連携講演会の開催
- ・地域住民教室の開催
- ・地域医療連携パスの会議開催
- ・地域連携開業医の訪問

臨床工学科

臨床工学科科長 清水 輝久

1. 特徴

平成 20 年度より臨床工学科が発足し、総合上飯田第一病院、上飯田クリニック、リハビリ病院、3 病院の医療機器の保守、点検、管理、手術室の麻酔器、病棟の人工呼吸器の使用前点検、病棟機器の使用後の点検、臨床業務では血液透析治療、血液浄化、ペースメーカーチェック、右心カテ、ペースメーカー植え込み時の機器操作、医療機器の取扱教育、新人看護師教育、医療機器の購入と運用などの業務を行い、医療機器の安全管理と治療の質的向上を目指して、技師 4 名で業務しています。

2. 2009 年活動実績

2009 年より総合上飯田第一病院の DPC 導入により院内での血液透析を行うようになり臨床業務が増加している。

血液透析	135 件
腹水濾過濃縮	4 件
ペースメーカーチェック	56 件
ペースメーカー植込み	4 件
右心カテ	11 件
電気生理検査 (EPS)	6 件
麻酔器・呼吸器の使用前点検、病棟機器の使用後の点検	
医療機器の取扱教育・新人看護師教育	
貸出機器のバーコード管理・医療機器の修理	
医療機器の購入申請	

3. 2010 年度目標

本年度は、昨年度より総合上飯田第一病院の DPC 導入により院内での血液透析業務の増加や、ペースメーカー植込み・右心カテ・EPS、PMX などの血液浄化の増加に対応出来るよう技士の増員と新人技士の教育、後継者の育成、病院機能評価への準備、医療機器の管理の整備、医療機器の購入と運用の管理、など年々業務が拡大してきており、効率よく業務を遂行できるよう業務改善も考慮していきたい。

今年も医療機器の安全の確保と医療機器の取扱い教育を実施し安全で安心して治療がうけられるよう医療機器の管理を遂行していき、地域の患者様から信頼され魅力ある病院になるよう業務していきたい。